

走り読み文学探訪リバイバル(その3)

「初秋(Early Autumn)」 Robert・B・Parker(パーカー)(菊池光 訳)

ハヤカワ・ミステリ文庫(1988.4発行) 505円(288p)

紹介者：榎本博康

【紹介】

私立探偵のスペンサーは、彼の事務所に訪れた美女の依頼を受ける。それは離婚した元の亭主から息子を取り戻すという仕事であった。スペンサーは彼一流の方法でそれを成し遂げるが、事態は陰悪になり、母親の身に危険が迫る。父親は保険金詐欺の大悪党で、息子は母親との取引の材料に過ぎないと分かる。実は、母親にしても息子の価値はそれでしかない。

ここからがスペンサーだ。彼は依頼主の意向を離れ、自分の費用でポールを親から自立させようとする。ポールは両親にかまってもらえないまま、テレビに育てられて15歳になっていた。何ら興味のあることもなく、何ら得意なこともなく、自分の身だしなみをかまうこともできず、食事のマナーすらしつけられたこともなく、15歳になっていた。

スペンサーの女友達であるスーザンが、前夫からもらった別荘地に、ポールと二人で小屋を建てることにした。そのような労働が彼に生きる自信をつけさせることになると思ったからだ。そして家は完成し、ポールは自立していく。

【感想】

ハードボイルド小説というところも、男っぽい、自分の役割には忠実だが冷酷、自分勝手、無口……といったイメージが浮かぶ。しかし、このスペンサーは私立探偵で男っぽくはあるが、料理が上手で、スーザンから信頼され、なかなか達者な会話を得意とし、しかも役割から逸脱してしまう。彼は、スペンサー・シリーズとしてパーカーが創作した人物だが、特にこの第7作、「初秋(EARLY AUTUMN)」(1981発表)によって、すっかり好きになってしまった。

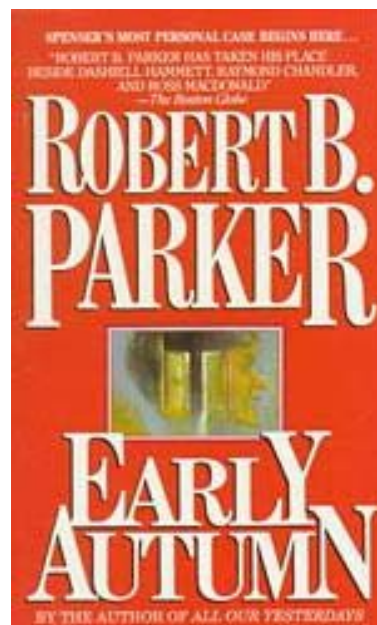
この小説にはランニングの場面が良く出てくる。そしてスペンサー自身もトレーニングの一貫に取り入れている。

冬の場面では「毛編みの防寒帽で耳をおおい、(略)紺のジャンパーを着たジョガーが通り過ぎた。その寒さの中でもらくらくとしたバネのある走りだった。私も三時間前に同じことをやったのだが、川から吹き上げる風が清教徒の神様のように厳しかった。」

季節が変わると、「前方を若い女が走っていた。(略)女性は春になると本物に近く見える。前の女がその例だ。」などなど。

そして、例の小屋を建てるためにキャンプを張った初日に、スペンサーはポールをランニングに連れ出す。初めてのポールはわずか1マイルで脇腹を押さえたが。

スペンサーにとってのランニングは、私立探偵として時には相手を威嚇し、また自分自身を守るために、体を鍛える手段の一つである。また、アウトローになりかねない彼が、中流一般



市民であるための自己確認とも言える。そんな彼は、ポールが自立するために必要な行動として、まず走らせた。毎日走るのだ。加えてボディビルをこなす。労働をする。そしてポールは、自分の進むべき道を見いだしていく。

この小説は、若い人が読めば自らの自立の物語であり、中年が読めば子育ての話でもあり得る。また、中年男のロマンを、スペンサーに仮託することもできる。娯楽小説ではあるが、多重にテーマをくみ取ることができる。そして何よりも、愛情を描いている。愛情のある話は、読んでいて嬉しい。

私はランニングが、この話のように単に風景の一部でありながら、登場人物の人生に深く染み込んでいると感じられる小説が好きだ。また、日常がランニングに満ちた街が好きだ。そしてスペンサーのような、自立したおせっかい人間も好きだ。せめて彼には、スーザンの幸せをもっと真剣に考えてくれたらと思う。

(1997. 5. 15)

#### [リバイバル感想]

1988年4月発売は同じだが、価格は現在800円+税。時代は確実に進んでいるが、まだ新刊で手に入るらしい。

さて、ランニング文学3傑はと聞かれると、当時は本書を上げていたが、今ではそれほどでもないと思っている。それはさておき、この本も類型的なランニングのイメージを利用していると思われる。「遙かなるセントラルパーク」と同様に、ランニングを通じて内面の変化を起こすことができるの思いである。そういうことは期待できそうな気はするが、実例となるとなかなか分からない。私の仲間はマラソンを知って、マラソンにのめり込んでしまい、生活時間をそれにつぎ込んでしまう、病気の人々だ。

ということで、私にはこの仮説の検証はできないが、ポジティブになるためにランニングに取り組んでみることに賛成だ。だが自己ベストとか、つまらない目標を設定することには賛成しない。それが目的化してしまうからだ。ランニングはあくまでも手段。君には君の人生の目標がある。

(2020. 5. 31)